昭和31年2月20日第三種郵便物認可　平成27年9月17日発行(木曜日発行)(9月10日発売)第60巻第35号

週刊新潮

9月17日号
400円

35

非難囂々でも「絶歌」25万部で印税4000万円を手中に！

文字数2万3000字！

週刊新潮に届いた「元少年A」からの奇っ怪な手紙

特集

手紙は他に限られた雑誌にも……
（『絶歌』に掲載された祖母との写真。下は見城社長）

いかに独善的な手記を出版しても、自己顕示欲は満足させられなかった。神戸連続児童殺傷事件の「元少年A」が、2万3000字以上にわたる手紙を週刊新潮に送りつけてきた。そこには、『絶歌』の生みの親である見城徹・幻冬舎社長（64）への怨嗟が綴られていたのだ。

夏の終わりとはいえ、停滞する前線の影響から、未だ蒸し暑さの残る週末の夜のこと。

都内有数の高級住宅街に建つマンションの車寄せに、数千万円の新車価格で知られる黒のマイバッハが滑り込んできた。

玄関前に到着すると、運転手が後部座席のドアを開け、「幻冬舎」の見城社長が姿を現した。

そこで、すかさず記者が、「週刊新潮に送られてきた、少年Aと思しき人物からの手紙のことで……」と、声をかけたものの、見城社長は、「警察呼ぶよ。いまから警察呼ぶから」と、ただただ繰り返すのみだった。

実は、その数日前、本誌に茶封筒が届いていた。消印は8月29日、発送は長野県岡谷市から。そして、その裏面に記されていた差出人の名は、〝元少年A〟。茶封筒の中身は、A4用紙20枚、文字数にして2万3000字以上に及ぶ手紙と、その文書データが収録されたCD-Rだった。

俄かには信じ難いとはいえ、その内容を吟味すると、そこには元少年Aの手記を発表した当事者しか知りえない、いわば〝秘密の暴露〟とでも言うべき事柄が、詳細に記されていた。

それゆえ、もう一方の当事者である見城社長に、その真偽について確認しよう

『絶歌』を引き継いだ岡社長

としたのだが、普段、〝顰蹙は金を出してでも買え〟という信念を勇ましく標榜するわりには、逃げの一手に終始したのである。

その手紙は、

〈元少年Aです〉

という書き出しで始まる。

〈ご存知の通り、僕は2015年6月11日、太田出版より手記『絶歌』を上梓しました。

この本の出版に至る経緯を巡り、6月25日発売（編集部注・実際は6月18日発売）の『週刊文春』に〝少年A「手記」出版　禁断の全真相〟と題された、幻冬舎社長・見城徹氏の独占インタヴューが掲載されました。しかしこの記事の内容は残念ながら事実とは異なっていました〉

この手紙の主は当事者として、ありのままの真実を包み隠さず伝えるために筆を執ったと記している。

〈事の始まりは2012年冬。僕は段ボール2箱分の缶詰を買い込み、カーテンを閉め切った穴蔵のような狭いアパートの一室に籠城し、版木に向かう棟方志巧（ママ）さながら、書き物机に鼻先をこすり付ける勢いで、体重をかけ一文字一文字刻み込むように見城氏への手紙を書いていました。実際に見城氏に送った手紙と一字一句同じ下書きが残っていますので、ここに転載します〉

ここから、『絶歌』出版に至る見城社長とのやり取りを赤裸々に記述している。その真偽については、一旦横に置き、以下、手紙の抜粋をご紹介する。

怪物は怪物を知る

まずは、最初に元少年Aが見城社長に書き送ったという手紙とは、以下のようなものだった。

〈見城徹様

はじめに、きちんと名前を名乗ることのできない無礼を、どうかお許しください。

私が「見城徹」という存在を知ったきっかけは、3年ほど前にBSで放送された「2010+未来へのエンジン　熱狂の創造者・松浦勝人のキセキ」という番組の中の、松浦さんと見城さんとの対談でした〉

〈麻薬のように次々と心の静脈に打ち込まれるあなたの刺激的な言葉の数々に、私はすっかりハイになってしまいました。

「もし死ぬまでに自分の本を出したいと思うことがあったら、頼めるのはこの人以外にあり得ない」

そう直感しました。

翌年、私の直感は確信へと変わります。

英会話講師リンゼイ・アン・ホーカーさん殺害事件で全国に指名手配され、ドラマティックな逃亡劇の果てに逮捕された市橋達也の手記「逮捕されるまで　空白の2年7ケ（ママ）月の記録」が2011年1月に発売され、私はすぐさま購読しました〉

〈「こんなすごい本を世に出したのは誰なんだろう？」

そう思い巻末のページを見てみると、発行者　見城徹とありました〉

〈「近いうちに自分は、この見城徹という底しれない怪物と接触することになる」

そうはっきり確信しました。

怪物は怪物を知る。

心の奥深くに封印していた私の中の怪物が、あなたと交わりたくて鋼鉄の扉をドンドンと叩きつづけているのです〉

まさしく、熱烈なラブレターである。

〈あなたが本の中で繰り返し述べていた「百匹の羊から滑り落ちる一匹の羊」の喩えが、ずっと私の脳内でリフレインしています。

（略）自分がかつて、百匹の羊の群れから滑り落ち、最も暗く深い奈落へと堕ちた一匹の呪われた黒い羊であったことを思い出しました〉

〈この手紙を受け取ったあなたは今、歴史のY字路に立っています。

あなたがこの手紙をどう扱うか、それによってあらゆる〝表現の未来〟が変わります。

闇に葬られた90年代最大の異端児を、日本少年犯罪史上最悪のモンスターを、他ならぬ「見城徹」の手で、歴史の表舞台に引きずり出してみたいとは思いませんか？〉

最後に、元少年Aは連絡方法として、フリーメールのIDとパスワードを示し、お互いがそこにログインして、〝下書きフォルダ〟にメッセージを残すことを提案している。実際、慎重を期したその方法で、元少年Aと見城社長はコミュニケーションを取り始めた。

返信として、見城社長は元少年Aに対し、

〈心のこもった自筆のお手紙をありがとうございました〉（13年1月17日）

と、メッセージを送った。

そこでは、元少年A〔酒鬼薔薇聖斗〕ではなく別のペンネームで、なおかつ、フィクションまたは、実録暴露物ではないノンフィクションを書くならば、編集担当チームによって出版を目指すのはやぶさかでないと告げている。

元少年Aからのメッセージは、その2日後。

〈私は、自らの〝劣等感〟と歪んだ〝優越感〟の源泉でもある〔酒鬼薔薇聖斗〕という呪われたブランドを、あなたに売り渡すつもりでいました〉〈あなたの優しい裏切りに横面を張り倒され、私は目が覚めました〉と記し、〈もし差し支えなければ、見城さんのご都合の良い日に、一度お会いすることは可能でしょうか？〉と持ちかけている。

最終的にスケジュール調整の連絡は、見城社長の秘書が行ったことになっているのだが、その名前は実在した秘書の名前と一致した。

さらに、元少年Aは1月22日に、

〈昨日、レンタルショップで「セカンドバージン」という連ドラを借りてきました。明らかにあなたをモデルにした〝女見城徹〟とでも形容したくなるような、鈴木京香さん演じるやり手の出版プロデューサーが、17歳年下の金融マンの青年と「死のような快楽」を求め道ならぬ恋に堕ちていく話です〉

という取り止めのない話を披露。「セカンドバージン」は2010年秋にNHKで放送されたテレビドラマである。

すると、見城社長は、

〈またまた素晴らしい返信でした。（略）他者へ対する想像力、水も漏らさぬ配慮に驚嘆します。（略）「セカンドバージン」は最初脚本家の大石静さんから見城さんの言葉を使って良いかという打診あり、それをOKしたら、さらに見城さんをモデルにしたいということになって、役作りの為に演出家と鈴木京香さんが幻冬舎に来社されました〉

と、当事者しか知り得ない内幕を明かしている。

では、ここで、ひとまず立ち止まり、ドラマの主役、鈴木京香は役作りのために幻冬舎に赴いていたという事実があるかどうか。

所属事務所に聞くと、「クランクイン前に、NHKの方と一緒に伺ったのは事実です」

演出家はNHKの職員であり、つまり、手紙に触れられている内容が、第三者からも事実であると裏付けられたわけだ。

「世に問うべきだ」

市橋達也の手記出版時、幻冬舎に抗議が殺到したこと、また、やしきたかじんの闘病を描いた『殉愛』が遺族からの猛抗議を受け、さすがの見城社長も世間からの批判にナイーブになっていることを説明されたという。

〈そうこうするうちに年が明け、2015年1月22日発売の『週刊新潮』に、〝「少年A」の手記出版を企画した「幻冬舎」への風当たり〟と題された記事が出ました。この記事が出る前日に編集チームから連絡があり、翌日発売の記事のPDFデータと、見城氏がどのような意図で取材に応じたかを僕に伝えてくれました〉

当時、見城社長は本誌の取材に対し、

「大体、手記を出したところで、売れないって」

などと、完全否定の構えだった。

〈この記事を受け、僕自身、「本当にこの本を出すべきだろうか？」と自問自答するようになりました。いろいろ考えた末、手記の出版をきっぱりと諦めようと思い、編集チームにその旨をメールで伝えました〉

一旦、『絶歌』は頓挫したのである。

〈そこから4日後の2015年1月26日の昼過ぎ、外出中に編集チームのメンバーから電話があり、以下の話をお聞きしました。

「見城は、うちから出すのはもう難しいけど、でもやっぱりこの本は世に問うべきだと思う、『このまま出版

次週は菊咲月増大号です

9月16日（水）発売　特別定価四百二十円

を断念すれば活字文化の衰退になる』、とまで言っています。（略）見城は太田出版の岡（聡）社長と親交があり、Aさんさえ良ければ、太田出版からこの本を出してもらえるよう、岡社長に話すつもりのようです。岡社長に原稿を見せていいかどうかAさんに確認してくれと言われました。いかがですか？」〉

この辺のやり取りが、元少年Aが見城社長に不信を抱くきっかけになった。

〈僕が太田出版と岡社長の名前を聞いたのはこのときが初めてです。

見城氏は文春の記者のインタヴューに『太田出版を含めた三社を彼に提案した』と答えていますが、これは虚偽です。（略）おそらく見城氏は、出版のために彼自らが積極的に動いた事実を隠すために、『三社を提案してAに任意で選ばせた』というイメージを世間に植え付けたかったのでしょうが、そんなみみっちい嘘をついてまで自分だけ無傷で逃げおおせたかったのです〉

人は、これから裏切る相手と、あんなに晴れやかな顔をして握手を交わせるものなのか……

このときの見城氏ほど醜い顔をした人間を、僕は見たことがありません〉

〈『それ以降、Aとは連絡を取っていない』（6月25日発売　週刊文春）

見城氏はここでも醜い嘘を塗り重ねていました。僕はこの日以降、出版の直前まで見城氏とメールのやり取りをし、見本が上がったときには見城氏と編集チームメンバーにお礼の手紙を添えて一冊ずつ渡しました。見城氏は文春の記者には『僕は読んでいないんだけど』などと話していますが、彼は確かに本を受け取り、「装丁も本文の構成も申し分ない。完璧だ」というメッセージもいただいています。しかし出版後、世間からの批難が殺到すると、見城氏は態度を豹変させ、靴に付いた泥を拭うように、僕との接点を〝汚点〟と見做して否定ました。（略）自分だけ正義漢ぶって、よくここまで掌を返せるものです〉

精神の退行

なおも、元少年Aの糾弾は終わらない。

〈見城氏はいろいろな場所でG（義理）N（人情）O（恩返し）こそが自分の信念であるとのたまっていますが、彼が〝GNO〟を貫くのはどうやら政治家、企業家、芸能人限定のようです。相手が物を言えない元犯罪者であれば、尻を拭って便所に流してしまえば一件落着というわけです〉

〈今頃は少年Aはあーだったこーだったと酒の肴にでもされているのかと思うと怒りの余り気絶しそうです。

自分の人を見る眼のなさに絶望します。一時でも彼を信じた自分を呪います。

見城さん、この僕の悔しさ、惨めさがあなたにわかりますか？

最後まであなたを信じ、礼を尽くし、感謝の意を述べて立ち去る者の背に唾をひっかけておきながら、『切なさと同時に安堵の気持ちがありました』（6月25日発売　週刊文春）などとよく言えたものです。何を泣ける美談にして一人で勝手に気持ち良くなっちゃってるのですか？〉

〈これが、『少年A「手記」出版　禁断の全真相〝裏の裏〟』です〉

と締め括り、『存在の耐えられない透明さ』というホームページを立ち上げたことも明かしている。

そのホームページを覗いてみると、自身のプロフィールや好きな映画、本の感想を載せ、さらにセルフポートレートと称する覆面姿の裸体写真や大量のナメクジに塩水を浴びせかけて制作したコラージュなども公開していた。

『絶歌』は被害者遺族の感情を踏みにじりながら、25万部を売り上げ、元少年Aが手にした印税は4000万円とも言われている。

本誌に送られてきた手紙では、世間から囂々たる非難を浴びたその手記の生みの親である見城社長に対し、元少年Aがその裏切りを告発していた。

とはいえ、それほどまでに見城社長に憤慨する理由がいま一つハッキリしないのも確かだ。なぜか。

かつて元少年Aが収容されていた関東医療少年院の当時の院長、杉本研士氏がこう指摘する。

「彼の場合、性的サディズムの最初の行動は、ナメクジの解剖でした。ホームページにおけるナメクジの扱いなどから判断するに、彼は治り切っていなかったと認めるほかありません」

ただ、徐々に更生はしていたものの、『絶歌』の出版が精神を退行させる結果を招いたという。

「世間に手記がまったく受け入れられず、過度のストレスから攻撃的感情にブレーキがかからなくなっている。幻冬舎社長の言葉のちょっとした差異に異常なまでに固執するのは、発達障害の特徴的な症状が現れているとも言えるのです」（同）

図らずも、見城社長が元少年Aを表現者として発掘したために心の闇を解き放ち、モンスターを蘇らせてしまったかもしれないのだ。

事件から18年

かと呆れ返ったものです〉

だが、その頃は〝異端者のメシア〟と心酔する見城社長の意見に従い、再度、手記出版に傾いたという。

〈最終調整を終えた『絶歌』の原稿を携え、2015年春、都内のホテルでの最後の打ち合わせに赴きました。僕は、再び出版を決意したことをまだ見城氏やチームのメンバーには伝えていませんでした。文春の記事によれば、見城氏はこの最後の打ち合わせで「手記を出せないことを通告するつもりだった」と話していますが、これも虚偽です〉

〈僕はひとまず仕上げた原稿と、テキストデータと挿入写真のデータを収めたディスク、太田出版の岡社長に宛てた手紙を見城氏に託しました。

見城氏は満足気な笑みを浮かべ、僕にこう言いました。

「いやぁ～、拍子抜けしたよ。もう君は出すつもりがないと思ってたから。それを想定して、君に言うつもりだったことがあるんだけど、それはもういいか？それとも聞いておくか？」

「聞いておきます」

僕が答えると、彼はつづけました。

「週刊新潮の記事が出たあと、君から〝関係者を悲しませたくない。出版を諦めます〟ってメールがきたじゃない？俺あのとき正直、心底ガッカリしたんだよ。なんだよ？そんなもんなの？ここまで身を削るようにして書いておきながら、〝その程度のこと〟で諦めちゃうの？君の想いなんてそんなもんだったの？って」〉

醜い嘘

早速、元少年Aはその日、太田出版の岡社長と対面することになる。

〈見城氏は唐突に、

「どうだ？今日これから岡に会ってみないか？」

と言い出しました。

僕は、まさかこの日岡社長にお会いすることになるとは予想しておらず、内心動揺しました。

まずは見城氏を介して岡社長に原稿と手紙を渡し、その後メール交換等で話が進んでいくのだと何となく考えていたからです〉

しかし、見城社長のほか編集チームのメンバー3人からも説得され、会うことを了承したという。

〈見城氏はもう一度チームの一人ひとりに、

「いいか？本当にいいか？もう後戻りできないぞ？」

と興奮気味に確認した上で、岡社長に、

「今日入ってる予定を全部キャンセルして、今すぐタクシーに飛び乗って＊＊ホテル＊＊号室まで来てくれ」

と伝えました。

間もなく岡社長がホテルに到着しました〉

ここも当事者しか知り得ないシーンである。実際、どうだったのか。

あらためて、岡社長に聞くと、

「今年の3月、見城さんから電話があって、ホテルの部屋番号を指示され、その日に彼と見城さんがいる場所に行ったことについては本当です」

と、手紙の内容を肯定し、もう一つ、出版前に彼と自分が交わした会話に関する記述も事実だと認めたのだ。

元少年Aの手紙は、さらにこう続いている。

〈僕と岡社長を引き合わせると、見城氏と幻冬舎の編集チームは退室しました。

帰り際、見城氏は僕のほうへ歩み寄り、

「まぁ、柄じゃないんだけど……」

と、恥ずかしそうに右手を差し出し、僕に握手を求めてきました。

手を握りながら彼は僕の肩を気合いを入れるようにポンッと叩き、

「頑張れよっ！」

と言って出て行きました〉

徐々に、元少年Aの感情はヒートアップする。

〈このときの光景を思い出すたび、身体の奥底から悲しみと怒りと悔しさのトルネードが巻き起こり、内臓を捩じ切られるような思い